

寿岳 章子さん、ふたたび

元祖わきまえない女に今学ぶこと

● 遠藤 織枝 (元文教大学教授)

寿岳さんは、女性のことば研究を中心に、生涯を通して精力的に活躍し、その話術の巧みさ、発想の斬新さ、牽引力の強さで人々を魅了した。今回、女子専門学校時代から西京大学(現・京都府立大学)の助教授時代までの日記が発見された。そこに記された、学問研究への情熱、家事を大事にする生活力、異性を思う複雑な心境、おしゃれへの追求など、青春真ただ中の寿岳さんを紹介する。

● 久米 弘子 (京都弁護士会所属弁護士・国際婦人年京都連絡会代表)

寿岳章子さんは、京都で「憲法を守る婦人の会」を立ち上げ、毎年、12月8日(日米開戦の日)と、8月15日(終戦の日)には元気一杯の楽しい女性の集会を主催された。また京都の民主府政・市政をとり戻すための活動もされてきた。まだ数少ない女性の大学教授だったが、今でいう「わきまえない物言う女性」の代表として活動され、広く愛された。ことばを人一倍大切にしながら、憲法と平和を守り、不平等と差別を許さない立場で、きちんとものを言ってこられた寿岳章子さん。地元京都からのご報告です。

● 佐竹 久仁子 (姫路獨協大学非常勤講師)

寿岳さんの『日本語と女』は今から40年以上も前に女らしさ(ジェンダー)とことばの関係に注目した研究である。それは当時の「女性語研究」にはない新しい視点を提示していて、現代のことばとジェンダー研究の先駆けといえる。寿岳さんの論じたことをもう一度あらためてふりかえり、その問題意識を共有したい。

● 田中 聡子 (朝日新聞記者)

新聞の読者からは、昔から「主人」という呼び方など、言葉に表れるジェンダー規範への違和感を指摘する声があった。その声は、いまもやむことはない。明るく、厳しく、社会に問題提起した寿岳さんの現代性を、読者の声や新聞記事から考える。

